

第五章 光る源氏の物語 冷泉帝後宮の入内争い

[第一段 齋宮と母御息所上京]

まことや(ところで)、かの齋宮も替はりたまひにしかば(御世替りとなれば天皇の名代として伊勢神宮にお勤めされた齋宮も御代わりになったので)、御息所上りたまひてのち(六条御息所が京にお戻りになってから)、変はらぬさまに何ごとも(光君が以前と変わらないように事あるごとに)訪らひきこえ(とぶらひ、贈物をお届けさせ申し)たまふことは(なさる事は)、ありがたきまで(十分過ぎるほどの)、情けを尽くしたまへど(ご厚情でしたが)、

「昔だにつれなかりし御心ばへの(昔でさえ冷淡だった殿のお気持ちの)、なかなかならむ名残は見じ(辛い思いを今さら繰り返したくない)」と、*思ひ放ちたまへれば(御息所は疾うに諦め切ったお返事を為さって居らしたので)、渡りたまひなどすることはことになし(光君がお出向きに成る事はありませんでした)。 *「思ひ放つ(おもひはなつ)」はく [動タ四] 思いをきっぱり捨てる。ふりきる。愛想をつかす。また、あきらめる。>と大辞泉にある。

あながちに(強引に)動かしきこえ(御息所を御誘い申し)たまひても(なさっても)、わが心ながら知りたく(我ながら自分の真心に自信が無く)、とかくかかづらはむ(何かと手間取りそうな)御歩きなども(おんありき、お忍び通いなども)、所狭う思しなりにたれば(面倒に御思いになっていた)、しひたるさまにもおはせず(光君も無理は為さらなかったのです)。

齋宮をぞ(ただ齋宮についてだけは)、「いかに*ねびなりたまひぬらむ(どのように御成長なされたのだろう)」と、ゆかしう思ひきこえたまふ(見てみたいと思い申しなさいます)。 *注にく源氏の心中。齋宮、二十歳。>とある。

なほ(御息所は今でも)、かの六条の旧宮を(ふるみや、旧邸を)いとよく修理し(とてもよく手入れして)つくろひたりければ(修繕してあったので)、みやびかにて住みたまひけり(風雅な暮らしぶりで住んで御出ででした)。

よしづきたまへること(季節行事をなさるのも)、旧り難くて(ふりがたくて、旧来どおりで)、よき女房など多く(たしなみのある接待女中などが多く)、好いたる人の集ひ所にて(教養人の社交場で)、ものさびしきやうなれど(全盛期の賑わいからは落ち着いたようでも)、心やれるさまにて経たまふほどに(気ままにお暮らしのようでしたが)、

にはかに重くわづらひたまひて(急に悪くお体をこわされて)、ものの(もののけの憑依が)いと心細く思されければ(ひどく不安にお成りで)、*罪深き所ほとりに年経つるも(神宮という魔力の近くで数年暮らした事が)、いみじう思して(いけなかったのかと御思いになって)、尼になりたまひぬ(尼になって仏門に入道なさってしまいました)。 *「罪深き所ほとり」についてはく伊勢神宮をさす。仏道から離れた生活であるので、こういう。源氏との愛執の罪の上に更に神域に長年過ごし、仏道から遠ざ

かっていたことを思う。＞と注にある。ということは、「神道」はご利益をもたらす魔力の＜願＞で、「仏道」は災いを払う自戒の＜行＞だ、ということなのだろうか。しかし、「神道」の＜御禊の戒律＞は神前に向かう際に穢れを祓うお清めの修行なのだろうし、「仏道」の＜護摩焚きの祓い＞は呪力によって邪念を封じる魔法なのだろうし、「神宮」が魔呼び神聖なら「寺社」の結界は魔除け神聖で、「神宮」だけが＜罪深い周辺＞というのは意外にも思えるが、「注」の言わんとする所は恐らく、＜罪＞という概念は仏法のもので、神道のものでは無いということなのだろう。尤も同時に、「神宮」も「寺社」も＜罪深さを意識する＞ということには、相当な説得力は感じる。また「注」は＜源氏との愛執の罪の上に更に神域に長年過ごし＞と簡潔に済ませているが、作者の記法は「ほとりにとしへつる」を＜所近くに何年か過ごした＞という言い方で、＜関わりから何年も過ぎた＞という御息所の気持ちを表していると感じるので、読者たる私は「罪深き所」が＜葵の上に取り付いた生霊＞なのだと思ひ出さずには居られない。従って此の文は複意ないし主意に、＜ものの(怨霊の暴走が)いと心細く思されければ(ひどく不安に御思いに成ったので)、罪深き所ほとりに年経つるも(生き霊への化身騒動からは何年も経ってはいるが、神宮という魔力に近付いたことが)、いみじう思して(おぞましく御思いになって)＞、を含んでいる。

大臣(おとど、光君は)、聞きたまひて(その事をお聞きに成って)、*かけかけしき筋にはあらねど(御執心からでは無く)、なほ(やはり)さる方のものをも聞こえあはせ(風雅の素養を御話しし合える)、人に思ひきこえつるを(一流人と思ひ申していた方が)、かく思しなりにけるが(仏門入りを決心なさったのが)口惜しうおぼえたまへば(残念にお感じに為ったので)、おどろきながら渡りたまへり(落ち着かない気分で六条邸に出向きなさいました)。*「掛け掛けし」は大辞泉に＜(形シク)いつも心にかけている。執着している。好色めいている。＞とある。つまりは「ご執心」。

飽かず(光君は絶える事無く)あはれなる(しみじみとした)御訪らひ(おんとぶらひ、慰めの言葉を直接)聞こえたまふ(御息所に御話し為さいました)。

近き御枕上に(ちかきおんまくらがみに、病床近くに)御座よそひて(おましょそひて、光君の御座が用意されていて)、脇息におしかかりて(御息所は肘掛にも垂れながら)、御返りなど聞こえたまふも(お返事を申し上げなさるのも)、いたう弱りたまへるけはひなれば(とても辛そうな様子だったので)、「絶えぬ心ざしのほどは(ずっと思ってきたこの気持ちは)、え見えたてまつらでや(お分かり頂けないままだろうか)」と、口惜しうて(残念で)、いみじう泣いたまふ(泣きに泣きなさいます)。

[第二段 御息所、齋宮を源氏に託す]

かくまでも思しとどめたりけるを(殿がこうまでも思い続けていなされたかと)、女も(御息所も女心を呼び覚まして男の真を信じて)、よろづにあはれに思して(万感胸に迫っては)、齋宮の御ことをぞ聞こえたまふ(齋宮の面倒を見てもらいたいと光君に御話しなさいます)。

「心細くてとまりたまはむを(娘は一人取り残されなさるので)、かならず(きっと)、ことに触れて数まへきこえたまへ(事あるごとにお忘れなく御世話下されませ)。また見ゆづる人もなく(他に後見してくれそうな人も無く)、たぐひなき御ありさまになむ(身寄りの無い御事情でございます)。かひなき身ながらも(私は不甲斐ないながらも)、今しばし(もう少しは)世の中を*思ひ

のどむるほどは(平穩に暮らせている間は)、とぎまかうぎまにものを思し知るまで(娘がとにやらかくやらの道理がお分かりになるまで)、見たてまつらむことこそ(お世話申し上げようと)思ひたまへつれ(考えておりました)」とても(と言うにも)、消え入りつつ(御息所は息も絶え絶えで)泣いたまふ(泣きなさいます)。*「思ひ和まる」は< [動ラ四] のどかになる。落ち着く。静まる。ゆったりとなる。>と大辞泉にある。

「かかる御ことなくてだに(そのような御話しが無くても)、思ひ放ちきこえさすべきにもあらぬを(放って置き申すはずもないものを)、まして(この上は)、心の及ばむに従ひては(気の付く事は全て)、何ごとも後見きこえむとなむ思うたまふる(どんなことでもお世話申し上げようと存じております)。さらに(もう何も)、うしろめたくな思ひきこえ(ご心配に思い申し)たまひそ(なきますな)」など聞こえたまへば(などと光君が申しなさいますと)、

「いとかたきこと(とても難しいことです)。まことにうち頼むべき親などにて(本当に頼り切れる実の親などに)、見ゆづる人だに(見てもらえそうな人でさえ)、女親に離れぬるは(母親を亡くした娘は)、いとあはれなることにこそはべるめれ(とても可哀相なもので御座いましょう)。

まして(その上に)、思ほし人めかさむにつけても(恋人のように為されるとしたら)、あぢきなき方やうち交り(嫌な憶測がきつと起こって)、人に*心も置かれたまはむ(奥様から警戒されることでしょう)。*「心置く」は<特に気をつける>ということのようで、「執着する」または「警戒する」とのこと(古語辞典)。「人」は正夫人たる紫の君なのだろうが、御息所が言う「人」を如何言い換えたものか、そのまま<人に>では<他人から>のようだし、<正室から>も口語らしくなく、<奥様から>にする。

うたてある思ひやりごとなれど(悪く考えた気の回し方ですが)、かけてきやうの(けしてそのような)世づいたる筋に思し寄るな(色めいた相手には娘をお考え下さいませぬように)。

憂き身を抓み侍るにも(うきみをつみはべるにも、情けない我が身を少し考えてみましても)、女は、思ひの外にて(理屈を越えて)もの思ひを添ふるものになむはべりければ(情念を膨らますものです)、いかでさる方をもて離れて(どうかその様なお考えはお持ちにならず)、見たてまつらむと思うたまふる(面倒を見て頂きたいと存じます)」など聞こえたまへば(などと御息所が申しなさいますので)、

「あいなくものたまふかな(存外な事を仰るものだな)」と思せど(と光君は御思いに成り為さりながらも)、

「年ごろに(ここ数年来)、よろづ思うたまへ(いろいろと考えては)知りにたるものを(分別をつけているものを)、昔の好き心の名残あり顔に(若い頃の遊び心のままでいるかのような風に)のたまひなすも本意なくなむ(仰いますのは心外です)。よし(分かっています)、おのづから(当然です)」とて(と言って御息所を安堵させなさいますが)、

外は暗うなり、内は大殿油の灰かに(おほとなぶらのほのかに、明かり火が少し)ものより通り

て見ゆるを(物影越しに見えたので)、「もしや(もしかすると御姿が見えるだろうか)」と、思て、やをら御几帳のほころびより見たまへば(そつと御几帳の隙間から光君が御覧になると)、心もとなきほどの火影に、御髪いとをかしげに(みぐしをととてもきれいに)はなやかに*そぎて(くつきりと尼削ぎにして)、寄りみたまへる(御息所が肘掛にもたれていらして)、絵に描きたらむさまして、いみじうあはれなり(非常に感慨深く御座いました)。 *御息所は尼になったので、子供のように背中半ばで髪を切り揃えていたのだろう。「尼削ぎ」という髪型(古語辞典)らしい。

*帳の東面に(ちやうのひむがしおもてに、帳台の東側に)添ひ臥したまへるぞ(添い寝なさっている人こそが)、宮ならむかし(前斎宮なのであろう)。 *「帳」を「とぼり」ではなく「ちやう」と読む時は「帳台」を指す、というか、「ちやう」が「帳台」のことだから誰かが「帳」と漢字表記したのだろう。平安期の調度品については実物展示の多い京都の風俗博物館の Web サイトが最強かと思われ、早速ページを開くと写真と詳しい解説があって、非常に助かる。「帳台」は母屋に設ける天蓋ベッドで、「ふつうには板敷きの上に、縹緗縁(うんげんべり)の畳二帖を並べて敷き、四隅に柱を立て、その上に、白絹張(きぬばり)の明障子(あかりしょうじ)をのせる」と記事があったが、詰まりは組み立て式のテント仕様らしい。南正面だから、光君は帳台の南側に几帳を隔てて坐して、帳台に置かれた燈台の明かりを頼りに、中の様子を覗き見していた、ということなのだろう。ということは、斎宮だった娘は母と源氏の話を丸々聞いていたということか。意外なほどの臨場感だ。

御几帳の*しどけなく引きやられたるより(几帳が気安く押しやられていたので)、御目とどめて見通したまへれば(光君は御目を凝らして見通しなされると)、頬杖つきて、いとも悲しと(母親の病体を悲しく)思いたるさまなり(案じている様子でした)。 *「しどけなく」は古語辞典に「ゆるび乱れている」とあるが、<非難の意はなく、うちとけた親しみやすい感じを表す>と特に補記されている。訳文では「無造作に」とされ苦心の程が感じられるが、いっそ「気安く」とまで言い換えてしまった方が、気構えの無い其場の雰囲気に合う気がする。というか、むしろ場面全体を描写する重要な言葉が、この「しどけなく」かと思う。

*はつかなれど(わずかしは見えないが)、いとうつくしげならむと見ゆ(とても美しい娘のように思われます)。御髪のかかりたるほど(髪垂れ具合)、頭つき(頭の形)、けはひ(佇まいと言ったものが)、あてに気高きものから(上品で身分の高さを備えながら)、*ひぢぢかに愛敬づきたまへるけはひ(小太りで可愛らしい顔つきを為さっている様子が)、しるく見えたまへば(はっきりお分かりになったので)、心もとなくゆかしきにも(光君はもっと良く見たかったが)、「さばかりのたまふものを(御息所がああ仰っているものを)」と、思し返す(思い直されます)。 *「はつか」は<(形動ナリ)わずか、ほのか>と古語辞典にある。原義が「果つか」だとすれば、原意は<無くなるのではないかと>であり、「はつかなれど見ゆ」は<やっとうにか見える>といったところだろうか。 *「ひぢぢか」は、「ひぢぢか」として<親しげな・小柄な(古語辞典)>とあるが、「ひぢぢか」で<びちびちして元気のいいさま。(大辞泉)>ともあり、定説が無いようだ。そこで、「あいぎやうづきたまへる(可愛い顔つきを為さっている)」の形容動詞として都合の良い言い換えを当てると、「小太りで」が若々しさがあって良さそうだ。

「いと苦しきさまりはべる(ひどく苦しくなってきました)。かたじけなきを(すみませんが)、はや渡らせたまひね(もうお引取り下されませ)」とて(と言って御息所は)、人にかき臥せられたまふ(女房に抱き伏せられなさいます)。

「近く参り来たるしるしに(御側にお見舞いに参りましたことで)、よろしう思されば(ご気分が優れれば)うれしかるべきを(幸いでしたが)、心苦しきわざかな(心苦しい次第です)。いかに思さるぞ(ご気分はいかがですか)」とて(と言って光君が)、覗きたまふけしきなれば(帳台を覗き込もうと為さるので)、

「いと恐ろしげにはべるや(ひどい格好をしております)。乱り心地の(患いの)いとかく限りなる折しも(いよいよかくも極まると言う時に)渡らせたまへるは(御出向き下さいました事は)、まことに浅からずなむ(本当に浅からぬ御縁だったのだと、感じ入っております)。

思ひはべることを(気に為っております事を)、すこしも聞こえさせつれば(少しでも御話し申し上げましたので)、さりとも(亡き後も)、頼もしくなむ(頼もしく存じます)」と聞こえさせたまふ(と御息所はご挨拶申し上げます)。

「かかる御遺言の列に(かかるごゆいごんのつらに、後を託す者の一人に私を)思しけるも(お考え下さったのも)、いとどあはれになむ(ますます感じ入っております)。

故院の御子たち(こゐんのみこたち、亡き父院は子供たちを)、あまたものしたまへど(多く儲けなさって、私には兄弟が多いけれど)、親しくむつび思ほすも(親しく思ってくださいる方は)、をさをさなきを(ほとんどないことから)、*主上の同じ御子たちのうちに数まへきこえたまひしかば(父上が齋宮を我が子同然と仰って居らしたので)、さこそは頼みきこえはべらめ(どうかそのように、私の妹のような形で家族と成る様をお願いしたい所です)。*注に<故桐壺院が齋宮を自分のお子の一人として扱ってくださった。「葵」巻に見える。>とある。六条御息所は故桐壺院の弟宮の妃であり、齋宮は故桐壺院の姪である。弟宮は早世し、御息所は未亡人になった。その御息所と火遊びをする若き日の光君を、故桐壺院は窘めたが、その時に齋宮に決まっていた従兄妹を兄弟同然に大事にせよ、とも故院は源氏に言っていた。今から7年前の、源氏 22 歳、御息所 29 歳、齋宮 13 歳、の時の事である。

すこしおとなしきほどになりぬる齢ながら(私も少しは一人前ともいえる歳になりながら)、あつかふ人もなければ(お世話する姫もいないので)、さうざうしきを(物足りなく思っていましたから)」など聞こえて(などと申し上げて)、帰りたまひぬ(光君は御帰りに成りました)。御訪らひ(その後のお見舞いの品々は)、今すこしたちまさりて(前にも増して手厚くなり)、しばしば聞こえたまふ(頻繁に届け申し為さりました)。

[第三段 六条御息所、死去]

七、八日ありて亡せたまひにけり(光君が見舞ってから、七、八日後に御息所はお亡くなりになりました)。

あへなう思さるるに(光君はあつけなく御思いに成って)、世もいとはかなくて(世の無常を感じると)、もの心細く思されて(どうにも気落ちなさって)、内裏へも参りたまはず(参内も為さらず)、とかくの御ことなど掟てさせたまふ(あれこれと御葬儀の手配を取決めなさいます)。

また頼もしき人もことにおはせざりけり(六条邸には光君の他に頼りに成る人も特には御出でに成りませんでした)。古き齋宮の宮司など(齋宮の世話役をしていた齋宮寮の役人などで)、仕うまつり馴れたるぞ(出入りをよくしていた者だけが)、わづかにことども定めける(何とか葬送の準備を整えたのです)。

御みづからも渡りたまへり(そこで光君ご自身が六条へ赴かれました)。宮に御消息聞こえたまふ(そして齋宮にお弔いを申し上げます。すると宮は、)。

「何ごともおぼえはべらでなむ(何も要領が分からずに居ります)」と、*女別当して(女別当を通して)、聞こえたまへり(御答え申しなさいました)。*「女別当(によべつたう)」は齋宮寮の女官だが、齋宮個人に仕える公設秘書のような特別職かと思われ、筆頭女房くらいを想像する。

「聞こえさせ(貴方のお世話は御息所にお約束申し上げ)、のたまひ置きしこともはべしを(言い残されても居りますので)、今は(今後は)、隔てなきさまに思されば(ご遠慮なさらずに御思い下されれば)、うれしくなむ(嬉しく存じます)」と聞こえたまひて(と光君は宮に申し上げ為さると)、人びと召し出でて(宮家の女房たちを呼び出して)、あるべきことども仰せたまふ(葬儀の手筈を指図なさいます)。

いと頼もしげに(とても頼もしい姿で)、年ごろの御心ばへ(年来の御無沙汰だった素気無さも)、取り返しつべう見ゆ(埋め合わせるほどに見えました)。いといかめしう(葬儀は大変厳かに)、殿の人びと(二条院の使用人たちを)、数もなう仕うまつらせたまへり(多数手伝わせて執り行わさせ為さいました)。

あはれにうち眺めつつ(葬儀後の光君は二条院の庭をぼんやり眺めては)、御精進にて(追善供養にと)、御簾下ろしこめて(日中から御簾を下ろしたまま)行はせたまふ(僧を呼んで念仏行を唱えさせなさいます)。宮には(そして齋宮には)、常に訪らひきこえたまふ(毎日お見舞いの御手紙を差し上げます)。

やうやう御心静まりたまひては(すると宮は次第にお心を落ち着けなさってからは)、みづから御返りなど聞こえたまふ(ご自分でお返事をお出しになります)。つつましく思したれど(気後れはありましたが)、御乳母など(乳母などの御側女房が)、「かたじけなし(殿への御返事が代筆では恐れ多う御座います)」と、そそのかしきこゆるなりけり(直筆を御勧め申し上げたのです)。

雪、曇(みぞれ)、かき乱れ荒るる日、「いかに(どうなのだろう)、宮のありさま(宮のご様子は)、かすかに眺めたまふらむ(寂しく雲行きを御覧に為って御出でなのだろうか)」と思ひやりきこえたまひて(と御気遣い申し為されて)、御使奉り給へり(おんつかひたてまつれたまへり、御手紙の使いをお立てに為りました)。

「ただ今の空を(こういう空模様を)、いかに御覧ずらむ(どうお思いでしょうか)。

降り乱れひまなき空に亡き人の、天翔るらむ宿ぞ悲しき」(和歌 14-16)

絶え間なく別れ惜しんで舞い乱れ、白い御霊は降り積もる」(意識 14-16)

*注に<源氏の斎宮への贈歌。『完訳』は「死後四十九日間は霊魂が家を離れないとする仏教観によるか。ここでは、亡母の娘への切実な執心をも思う」と注す。ほとんど技巧のない和歌。次の斎宮の返歌が技巧的なのと対照的である。>とある。ただ、「天翔るらむ(あまかけるらむ)」が<粉雪が宮邸の屋根に舞い積もる様>に故御息所の御霊を偲んでいるなら、光君にしては珍しく理屈っぽさが抑えられた、相当に叙情的な歌にも思える。

空色の紙の、曇らはしきに書いたまへり(光君はこの歌を、くすんだ薄い水色の紙にお書きになっていました)。「空色」はWebサイトの色見本によれば、ほぼ<薄い水色>で良さそうだ。それが「くもらはしき(くすんでいる)」なのだから、Wikipediaにある「薄縹(うすはなだ)」あたりかと思当する。

若き人の御目にとどまるばかりと(若い宮が気に入るようにと)、心してつくろひたまへる(工夫して体裁を整えなされたもので)、いと*目もあやなり(大変見事でした)。*「目もあや」は<まばゆいほど美しい、正視できないほど意外な>と古語辞典にある。「目にも怪し」か。

宮は、いと聞こえにくくしたまへど(とてもお返事を申し上げにくく御思いでしたが)、これかれ(誰も彼もが)、「人づてには(代筆では)、いと便なきこと(とても失礼にあたります)」と責めきこゆれば(と難じ申し上げたので)、

*鈍色の紙の(ねずみ色の紙の)、いと香ばしう(良く香を焚き込めた)艶なるに(えんなるに、美しいものに)、*墨つきなど(すみつきなど、墨の濃さを)紛らはして(読みにくいほど薄くして)、*「鈍色(にびいろ)」は<にぶい色>ということ<濃い灰色>とのこと(Wikipedia)。喪服または出家者の服の色として、この物語でも既に何度か述べられている。*「墨つきなど紛らはして」については、注に<紙の色と墨の色とが似ていて判然としない書きさま。『集成』は「薄鼠色の紙に筆跡が見え隠れし、次の「消えがてに」の歌意にふさわしいものとなる」と注す。>とある。

「消えがてにふるぞ悲しきかきくらし、わが身それとも思ほえぬ世に」(和歌 14-17)

「まるでわたしをせめるよに、きたのしんちにあめがふる」(意識 14-17)

*注に<源氏の「降り乱れ」を受けて「消えがてに降る」と返す。「降る」「経る」の掛詞。「消え」「降る」「かきくらし」は「雪」「霽」の縁語。「わが身それとも」に「霽」を折り込む。大変に技巧的な和歌である。>とある。古語辞典で語意を調べると、「がてに」は<～することができないで>の意。「掻き暗す」は<天気が空を暗くする>と<気が塞がる>。「思ほゆ」は「思はゆ」に同じで、<～と自然に思われる>とあるから、<～と素直に受け止める>とも言えそうで、「それとも思ほえぬ世に」は<事実とは受け止められない>であり、「霽とも思ほえぬ世に」は<霽が良いとは思えない日なのに＝生憎の霽模様>ということだろう。なお、宮にとっての「わが身」とは<母に先立たれた現実>である。即ち当歌は全編が複意で、「消えがてにふるぞ悲しきかきくらし(止まらずに降る雪で空は暗

く重苦しいし、母への恋慕が断ち切れないので心は悲しみに暮れています)、わが身それとも思ほえぬ世に(生憎の囊模様と相まって、母の他界を現実だとは信じられません)」、という歌意になる。〈大変に技巧的〉なのかもしれないが、意味の重複に理が立ちすぎる、ようにも見える。穿って、この執拗さが重い気分を表現している、とみるべきだろうか。しかし〈技巧〉とは〈言葉遊び〉だから、〈大変に技巧的な和歌〉は相聞歌なら楽しさや華やぎも出るが、追悼歌としては心情が汲み取れない嫌いがある。同せ「乞ひ」なら、私は(意識)のように読みたい。

つつまじげなる書きざま(丁寧な書き方だが)、いとおほどかに(とてもゆったりと)、御手すぐれてはあらねど(御筆跡は手慣れた字体では無いものの)、らうたげに(可愛らしく)あてはかなる筋に見ゆ(上品な書風が感じられます)。

[第四段 齋宮を養女とし、入内を計画]

下りたまひしほどより(伊勢に下向なさった頃から光君は齋宮を)、なほあらず思したりしを(ただならず御思いでしたが)、「今は心にかけて(今はその気になれば)、ともかくも(どのようにも)聞こえ寄りぬべきぞかし(言い寄る事が出来るわけなのだ)」と思すには(と御思いになる一方では)、例の、引き返し(再度また、思い直されて)、

「いとほしくこそ(齋宮は母を亡くして御可哀相なのではないか)。故御息所の、いとうしろめたげに(とてもその事を心配して)心おきたまひしを(私が手を出すことを警戒して居らしたことでもある)。

ことわりなれど(私の行状からすれば、そうした懸念は無理もないが)、世の中の人も(世間の人々も)、さやうに思ひ寄りぬべきことなるを(故御息所と同じ様に思い当たるだろうから)、引き違へ(さような予想に反して)、心清くてあつかひきこえむ(我は宮を色恋抜きで御世話申す事にしよう)。

*主上の今少し物思し知る齡に成らせ給ひなば(うへのいますこしものおぼししるよはひにならせたまひなば、帝がもう少し物心付く御歳になられなされば)、内裏住みせさせ奉りて(うちずみせさせたてまつりて、姫宮を入内させ申し上げて)、*さうごうしきに(娘の世話に勤しむ権中納言への羨みもあるので)、かしづきぐさにこそ(御育て申す楽しみとすることこそ、面白そうだ)」と思しなる(と御思い為さいます)。*「主上(うへ)」は今上帝で、公式には光君の弟君たる血縁であり、内実は入道宮との間に出来た不義の実子である。注にはく冷泉帝は、現在十一歳。すでにこの年二月に元服も済んでいる。>とある。*「さうごうし(物足りない)」については、権中納言が娘を入内させようとしているのを、光君が羨んでいると言う記述が第一章第三段に「かの四の君の御腹の姫君、十二になりたまふを、内裏に参らせむとかしづきたまふ」とあった。

いとまめやかにねむごろに聞こえたまひて(そこで光君は、大変に懇切丁寧な御手紙を前齋宮に差し上げなさて)、さるべき折々は渡りなどしたまふ(追善供養の折々には御自身で六条邸までお出掛けなさいます)。

「かたじけなくとも(齋宮に対し恐縮ですが)、昔の御名残に思しなずらへて(私を亡き御母君の古くからの縁者とでも御見做し下さって)、気遠からず(けどほからず、他人行儀でない近親者として)もてなさせたまはば(御世話させて頂ければ)なむ(その御許しこそが)、本意なる心地すべき(ほいなるこちすべき、私の本望と言うべきところで御座います)」

など聞こえたまへど(というように光君は前齋宮に申し上げなさいましたが)、わりなくもの恥ぢをしたまふ(齋宮はどうにも人見知りをする)奥まりたる人さまにて(内気な御性格で)、ほのかにも御声など聞かせたてまつらむは(ほんの僅かでも自分の御声を君にお聞かせ申し上げなさいます事は)、いと世になくめづらかなることと(この上なく目に辛く見苦しいことと=有り得ない事と)思したれば(御思いに成っていらしたので)、人びとも聞こえわづらひて(女房たちも光君と齋宮との御取次ぎに難儀して)、かかる御心さまを愁へきこえあへり(こうした宮の御心構えを憂慮申し上げ合っていました)。

「女別当、内侍などいふ人びと(齋宮寮の側仕え女官などの女房)、あるは(また中には)、離れたてまつらぬ(遠縁でも居られない)わかむどほりなどにて(王家血筋で)、心ばせある人々(教養の高い付き人たちも)多かるべし(齋宮には多くいるのだろう)。

この(私が)、人知れず思ふ方の(自分なりに考えているお世話の仕方)でまじらひをせさせたてまつらむに(後宮生活をなさせて頂いたと申し上げても)、人に劣りたまふまじかめり(この宮なら他の妃たちに劣りなさるといふ事は御有りに成らないだろう)。

いかでさやかに(どうかしてはつきりと)、御容貌を(おんかたちを、お顔立ちを)見てしがな(見てみたいものだ)」と思すも(と光君が御思いに成るのも)、うちとくべき(全く色事なしの)御親心には(親心と言うものでは)あらずやありけむ(無いのかも知れません)。

わが御心も定めがたければ(我ながら覚悟を決めかねる所もあるので)、かく思ふといふことも(宮を後宮いりさせる心算だとも)、人にも漏らしたまはず(光君は公言なさいません)。

御わざなどの御ことをも(供養仏事の段取りなども)取り分きてせさせたまへば(光君が格別に御手配なされたので)、ありがたき御心を(その手厚いご配慮を)、宮人もよろこびあへり(宮家の人々も喜び合っていました)。

はかなく(御息所が亡くなって)過ぐる月日に添へて(六条邸は日が経つにつれて)、いとどさびしく(ますます寂しく)、心細きことのみまさるに(先行きの不安ばかりが増えて来て)、さぶらふ人びとも(仕えていた女房たちも)、やうやうあかれ行きなどして(だんだん別れ別れになって行ったりして)、下つ方の京極わたりなれば(下京の外れの方なので)、人気遠く(ひとけどほく、人通りも無く)、山寺の*入相の声々に添へても(山寺の夕暮れに撞く鐘の音が聞こえると)、*音泣きがちにてぞ(釣られ泣きをしがちな様子で)、過ぐしたまふ(齋宮は御暮らしでした)。 *「入相の声々(いりあひのこゑごゑ)」は<夕暮れに撞く寺々の鐘の音>、との事(古語辞典)。 *「音泣く(ねなく)」は<声を立てて泣く>、との事(古語辞典)。「入相の声々」に引っ掛けた言い方か。

同じき御親と聞こえしなかにも(同じ様に御母君とは申しまして)、片時の間も立ち離れたてまつりたまはで(斎宮たる我を寸暇も離れ申し為さりあそばさず)、ならばしたてまつりたまひて(仕付け申し為さりあそばして)、斎宮にも親添ひて下りたまふことは(伊勢にまで親が付き添って下りなさる事は)、例(れい)なきことなるを、あながちに誘ひきこえたまひし御心に(一途に先導申しなされた母御のみこころに)、限りある道にては(定めある寿命とあつては)、たぐひきこえ(同道申し上げ)たまはずなりにしを(為さることが出来なかった)、干る世なう思し(ひるよなうおぼし、涙の乾く間も無く御思いになり)嘆きたり(斎宮は嘆いて御出ででした)。

*さぶらふ人びと(宮に求婚を申し入れて返事を待って控えている者どもは)、貴きも賤しきも(たかきもいやしきも、身分の高い者も低い者も)あまたあり(多くいました)。*此処での「侍ふ人びと」は此れに続く記述からして、<仕えている女房たち>では無く、<控えている者たち>だろうが、何の為に誰が<控えている>のかと言えば、<貴きも賤しきもある多くの求婚者の取次ぎを、宮にする女房たち>なのかも知れない。

されど、大臣の(内大臣たる光君が)、「御乳母たちだに(宮の御側係りの乳母でさえ)、心にまかせたること(勝手な判断で)、引き出し仕うまつるな(取り次ぎ申しては為らない)」など、親がり(親ぶって)申したまへば(言い付けなされたので)、

「いと恥づかしき御ありさまに(大変ご立派な殿の御様子なので)、便なきこと(不都合な事を)聞こし召しつけられじ(御耳に入れては為るまい)」と言ひ思ひつつ(と言つては考えもして)、はかなきことの情けも(ほんの少しの色恋沙汰も)、さらにつくらず(女房たちはさらさら取り持ちませんでした)。

[第五段 朱雀院と源氏の斎宮をめぐる確執]

院にも(朱雀院におかれまして)、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に(かの日に斎宮が伊勢群行に際して院の御在位中に御挨拶をなされた大極殿での厳かな送別式の日)、*ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を(公務の分別を忘れかかるほど美しく御思いに為った斎宮の御顔立ちを)、忘れがたう思しおきければ(忘れ難く御思い置かれていらしたので)、*「賢木」巻での群行式の参内場面の記述に、斎宮が<いとゆゆしきまで見えたまふを、帝、御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふ>とあった。「ゆゆしき」は、今日では専ら<由々しき問題=大いに懸念される事態>という成句の形容で使われると思うが、これは恐らく古語での<不吉なまでの>という意を受けて悪い事を修辭しているのだろう。ただし原義は<神聖で畏れ多い(古語辞典)>ということらしく、<人智を超えた魔力・魅力>を底意に持つ言葉のようで、だから<間違いを引き起こしかねない>と言い換えても良さそうだ。

「参りたまひて(斎宮も私の院邸に参りなされて)、*斎院など(賀茂社に我が名代として奉仕した妹宮などのように)、御はらからの宮々おはしますたぐひにて(母後の同腹の兄妹のひとりとして)、さぶらひたまへ(お暮らしなさい)」と、御息所にも聞こえたまひき(母御の御息所にも申し為さって御出ででした)。*注に<朱雀院の詞。斎院は桐壺院の女三宮、母弘徽殿太后。「葵」巻で斎院にな

り、「賢木」巻で桐壺院崩御により、朝顔姫君と交替した。朱雀院の姉妹と同様に院の御所でお暮らしなさいという勧誘、実質的には結婚の申し込み。>とある。

されど(しかし御息所は)、「やむごとなき人びとさぶらひたまふに(高貴な妃たちが何人も居る御所中に)、数々なる御後見もなくてや(これといった後ろ盾も無しでは心許無い)」と思しつつみ(と心配なさって)、「主上は(うへは、朱雀院におかれましては)、いとあつしうおはしますも恐ろしう(重篤が懸念され)、またもの思ひや加へたまはむ(齋宮に更なる心労を与え申し上げ兼ねない)」と、憚り過ぐしたまひしを(ご遠慮申して来られましたものを)、今は(御息所が亡くなられた今となつては)、まして誰かは仕うまつらむと(まして誰が齋宮に御仕えして院へ御供出来ようかと)、人びと思ひたるを(女房たちは考えていましたが)、ねむごろに(重ねて親しげなお誘いを)院には思しのたまはせけり(院に於かれては仰せに為って御出ででした)。

大臣(おとど、内大臣の光君は)、聞きたまひて(齋宮に対する院からのお誘いを耳にされて)、「院より御けしきあらむを(院の御意向があるのを)、引き違へ(それに反して)、横取りたまはむを(帝が横取りなさるのは)、かたじけなきこと(畏れ多い事)」と思すに(と御思いに為るも)、人の御ありさまのいとらうたげに(齋宮の容姿がとても労しく)、見放たむはまた口惜しうて(御諦めなさるのもまた残念で)、入道の宮にぞ聞こえたまひける(入信なさった御母宮に御相談申し上げなさいました)。

「かうかうのことをなむ(齋宮の行く末について、これこれといったことを)、思うまへわづらふに(思案いたしておりますが)、母御息所、いと重々しく心深きさまにものしはべりしを(とても慎重で奥ゆかしい方で御座いましたものを)、*あぢきなき好き心にまかせて(私の申し訳無い若気の至りで)、さるまじき名をも流し(不名誉な浮名まで流し)、憂きものに思ひ置かれはべりにしをなむ(私を憎んで居らしたままになってしまったのが)、世にいとほしく思ひたまふる(本当に心苦しく思っております)。 *「あぢきなき」はく味気ない>に通じる言葉で、「しようもない」「価値が無い」を原義として「不当な」「不都合な」「つまらない」といった修辭になる、かと思う。しかし、話し相手が入道宮とあつては、光君は御息所の事に限らず<好き心>について、およそ客観的な言い方など出来よう筈も無い。従つて此処での「あぢきなき」は、「無益な」とか「残念な」とかでは無く、「無軌道な」「奔放な」「不徳な」という意味で<好き心=盛んな発情>に、圧倒的な実感を持って、掛からざるを得ないだろう。

この世にて、その恨みの心とけず過ぎはべりにしを(御息所は今生で私への恨みが晴れずじまいで居らしたものを)、今はとなりての際に(ご臨終の際に)、この齋宮の御ことをなむ、ものせられしかば(齋宮の御後見を私に御託しなされたのですから)、さも聞き置き(それを聞いた私が)、心にも残すまじうこそは(心に曇りを残さないように今度こそは)、さすがに見おきたまひけめ(さすがにしっかり見届け為さるに違いない)、と思ひたまふるにも(とお思い下された事にも)、忍びがたう(泣けて来ます)。

おほかたの世につけてだに(世間話としても)、心苦しきことは見聞き過ぐされぬわざにはべるを(親との死に別れには同情を禁じえない所ですので)、いかで、なき蔭にても(いくら亡くなった後とは言え)、かの恨み忘るばかり、と思ひたまふるを(せめて故御息所の恨みを慰めるほどの、

罪滅ぼしを致したいものと存じておりますが)、

内裏にも(うちにも、御所様にも)、さこそおとなびさせたまへど(大分おとなびて御成りですが)、幼き御齡に(いときなきおんよはひに、まだ御幼少に)おはしますを(あられますので)、すこし物の心知る人は(少し年上の分別ある齋宮ぐらいの人などは)さぶらはれてもよくやと思ひたまふるを(御側に侍らせても宜しいかと存じ上げますが)、*御定めに(宮様の御判断に従いたく存じます)」など聞こえたまへば(などと申し上げなさいますと、宮はこう御答えなさいます)、*注にく「御定めに」の下に「従ひはべらむ」などの語句が省略。『完訳』は「藤壺を強く説得しておきながら、相手に判断をまかせる巧みさに注意。事は藤壺の意志で運ぶ」と注す。>とある。院の「御気色」に対抗できるのは、義理にも母筋の入道宮の「御気色」しかない、ということらしい。

「いとよう思し寄りけるを(とても良く御考え付き下さりましたものですね)、院にも、思さむことは(院に於かれましても御心をお寄せなさる事は)、げにかたじけなう、いとほしかるべけれど(実に勿体無くも、それを違えるのは大変心苦しいところですが)、かの御遺言をかこちて(故御息所の御遺言だからと託けて)、知らず顔に参らせたてまつりたまへかし(院の御気色は知らず顔で後宮入りさせてしまいなさいな)。

今はた(院は今は殊更には)、さやうのこと、わざとも思しとどめず(そのような色事に御執着為されず)、御行なひがちになりたまひて(念仏行に熱心になっていらっしゃるので)、かう聞こえたまふを(この事を御聞きに為っても)、深うしも思しとがめじと思ひたまふる(深く根に御持ちには為らないと存じます)」

「さらば、御けしきありて(では宮様の御意向にて)、数まへさせたまはば(齋宮を入内させて妃の数にお入れ申し上げたとして)、もよほしばかりの言を(私は事情説明程度の事柄を)、添ふるになしはべらむ(申し添えた事に致します)。

とごまかうざまに(あれこれと)、思ひたまへ残すことなきに(配慮して遺漏無きを期し)、かくまでさばかりの心構へも(このように今のような院への遠慮も)、まねびはべるに(そのまま御話ししましたが)、世人や(よひとや、世間の人)は)いかにとこそ、憚りはべれ(どのように取り沙汰するか気掛かりです)」など聞こえたまで(などと光君は宮様に申し上げなさって)、

後には(のちには、宮様の御意向を受けたという形にした後では)、「げに(私は全く院の御意向は)、知らぬやうにて(知らないという事にして)、ここに渡したてまつりてむ(後宮入りの後見を仕るべく、我が二条院へ齋宮に御移り頂こう)」と思す(と御思いに為ります)。

女君にも(二条の君にも寝物語で)、しかなむ思ひ語らひきこえて(光君はそうした思いを御話し申し上げて)、「過ぐいたまはむに(一緒にお過ごしに為るのに)、いとよきほどなるあはひならむ(あなたと齋宮はとても良いお年頃同士でしょう)」と、聞こえ知らせたまへば(お知らせなされたので)、うれしきことに思して(君も嬉しく御思いになって)、御渡りのことをいそぎたまふ(齋宮が移転する為に二条院の迎え準備を為さいます)。

[第六段 冷泉帝後宮の入内争い]

入道の宮、兵部卿宮の(実兄の兵部卿宮が)、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを(姫君を早く入内させようと躍起になって御出でなのを)、「大臣の隙ある仲にて(光君が兄宮と疎遠なので)、いかがもてなしたまはむ(どのように取り計らうものやら)」と、心苦しく思す(案じて御出ででした)。

権中納言の御女は(ごんのちゅうなごんのおんむすめは、太政大臣家の総領である権中納言の御息女は)、弘徽殿の女御と聞こゆ(こうきでんのにようごときこゆ、弘徽殿の女御でいらっしゃる)。*大殿の御子にて(おほとのみこにて、太政大臣の養女ということにして)、いとよそほしう(盛大に装いたてて)もてかしづきたまふ(一族挙げて後押しなさっている)。*主上もよき御遊びがたきに思いたり(御所様も良い遊び相手と御思いのようです)。*注に<権中納言の娘は祖父の太政大臣の養女となって入内。源氏物語では女御として入内するのは大臣または親王の娘で、大納言以下の娘は更衣として入内している。娘の格上げをはかったもの。>とある。*注に<冷泉帝十一歳、弘徽殿女御十二歳。ちょうど良い釣り合い。>とある。

「宮の中の君も同じほどにおはすれば(兵部卿宮の次女姫も二人と同じ年頃なので)、うたて舞遊びの心地すべきを(無駄に幼児遊びの仲間が増える気がするので)、おとなしき御後見は(いくら年長の齋宮あたりが女御になれば)、いとうれしかべいこと(とても喜ばしい事です)」と思しのたまひて(と入道宮は御思いもし仰りもして)、さる御けしき聞こえたまひつつ(その御意向を自ら御所に申し上げなさるその一方では)、

大臣のよろづに思し至らぬことなく(光君の方も御所様の御仕えに万事抜かりなく)、公方の御後見は(おほやけがたのおんうしろみは、公式の政務補佐は)さらにもいはず(云うまでも無く恙無く御勤め申し)、明け暮れにつけて(日常の所作についても)、こまかなる御心ばへの(細かい御配慮で)、いとあはれに見えたまふを(大変思い遣りを込めて御出でなので)、

頼もしきものに思ひきこえたまひて(入道宮は光君に任せておけば上首尾だろうと御安心申しなさって)、いとあつしくのみおはしませば(御自身は御加減が御悪いので)、参りなどしたまひても(参内されても)、*心やすくさぶらひたまふこともかたきを(寛いで長居申し上げる事も出来ないことから)、すこしおとなびて(齋宮のように御所様より少し年長で)、添ひさぶらはむ御後見は(御側に付き侍る御世話役は)、かならずあるべきことなりけり(かならずいなければならぬ、と御思いなのでした)。*注に<『集成』は「宮中は病を忌む上に、十分な療養(加持祈祷)ができないからである」と注す。>とある。

(2010年3月2日、読了)